

圏外のアンテナ

[金色の瞳]の巻

先週、ミーティングがあって福岡に行った。爆睡から目を覚ますと、飛行機はすでに降下中。

ミーティングの開始は数時間後。それまでどうしよう？ 寝ぼけまなこで玄界灘の島影を見下ろしていると、唐突に1つのアイデアが浮かんできた。「そうだ、志賀島（しかのしま）に行つて、金印を見よう！」

出し抜けに記憶の海馬に浮上したのは、後漢の光武帝がくれた金印。「漢委奴国王（かんのわのなのこくおう）」と彫られた、あの、昔歴史の試験によく出てきたお宝のことである。

慌てて空港から志賀島の経路を調べると、地下鉄とJRを乗り継いで片道1時間40分。う～ん、遠い。

だが、さらに検索すると、今では志賀島ではなく、福岡市博物館に移されていることが判明。行き当たりばつたりの思いつきが、みるみる具体的になっていく。

博物館にたどり着くと、金印は常設展示室に、印字面を下にして、ポツンと陳列されていた。

昔は金印の造形なんか意識したこともなかったから、精緻で美しい金細工が施されていることを、数10年の時を超えて、初めて知る。

つまみの部分は、とぐろを巻いた蛇（へび）の形で、隆起した無数のウロコが全身を覆い、2つの大きな目がギロリとこちらを睨んでいる。

説明パネルによると、後漢は、北方民族には「ラクダのつまみ」を、南方の農耕民族には「蛇のつまみ」を与えたのだそう。へえ～、ラクダ？ 蛇？ そして……現代はパンダかあ～！ ま、確かに可愛いからね。

2000年も前から、愛らしい動物は、外交上有効なアイテムだったってことね。

……などと考えて、ちょっと待った～！ ところで蛇は、もらって嬉しいほど、可愛い動物か？ そこで今度は、可愛い…可愛い…と念じながら、金細工の蛇と目を合わせてみる。

と、キョトンと愛嬌のある瞳のように思えてきたから、不思議である。

=2018年5月25日掲載=



頭を逆さにした蛇の身体には2つの目と、125個ものウロコの彫金が